

「夜逃げ」「二人のならず者」「笑いがこみ上げる」

－日本語分析への多元的・動的アプローチ－

佐々木 一 隆

はじめに

本稿の目的は、最近の理論動向もふまえ、日本語における多元的かつ動的な言語分析を藤沢周平の短編小説「踊る手」を素材に試みることである。特に音声・意味も内包する広義の文法と語用論との相互作用の観点から論じる。

生成文法における広義の文法には、音声、意味、両者の対応関係を捉える文構造を扱う部門があり、語の構造を扱う部門も含まれる。そして最小単位としての語から始まり、中間的な句を經由して、文を最大の研究対象とする点に特徴がある。こうした文文法としての生成文法がもつ各部門の名称を示すと次のようになる。

広義の文法

- 音韻論（音構造を扱う部門）
- 形態論（語構造を扱う部門）
- 統語論（文構造を扱う部門）
- 意味論（字義どおりの意味を扱う部門）

本論文では、音韻論を除く3つの部門に焦点を当て、形態論では派生名詞や複合語などに、統語論では名詞句内部に現れる数量詞とその統語的分布の広がりや文となって現れる慣用表現などに着目し、併せて語や文の字義どおりの意味を扱う意味論も考慮に入れることにする。なお、音韻論を取り上げなかった主な理由は、本稿が小説で展開される文字情報に基づいているためである。ただ、藤沢作品は朗読したり、映画化されたりすると、その小気味よい音の響きやテンポを感じることができるので、別の機会を用いて音韻分析をする価値はあると思われる。

以上、前提としている広義の文文法について概観したが、本稿では最近の理論動向を参照しつつ、話し手の意図を捉え、談話文法ともかかわる語用論の観点も重ね合わせて日本語の分析をしていく。その際には、Keizer (2007)、Ariel (2008)、

Feist (2012) の研究を重要な多元的アプローチとして位置づけ、さらに Kajita (1977, 1986, 1997)、Sasaki (2008)、Sasaki and Yagi (2003)、佐々木 (2011) で論じた動的観点も加味した分析を展開する。分析の特徴を図示すると次のようになる。

広義の文法 ⇔ 語用論

↑

(動的観点)

以下、第I節では理論的枠組みを説明し、第II節では対象とする日本語のデータを示し、第III節ではこの日本語のデータについて語・句・文のレベルで多元的・動的分析の方向性を示す。

1. 理論的枠組み

1. 多元的アプローチによる先行研究

近年、文法と語用論との接点における多元的な研究が進んできており、その代表的なものとして Keizer (2007)、Ariel (2008)、Feist (2012) などを挙げるができる。それぞれの研究の概要をまとめると以下のようなになる。

Keizer (2007) は英語の名詞句について包括的に論じたものである。大別して Part I と Part II から構成され、Part I では名詞句の内部構造に焦点を合わせ、特に主要部の問題について取り上げている。Part II では言語運用の基となる認知的・語用論的諸要因に着目して、実際の場面で話し手がしかるべき名詞句をどのように選択するかについて論じている。特定の理論に依拠せずに、コーパスを用いて論を展開している点も特徴的である。

Ariel (2008) は語用論と文法との関係を体系的に論じたものである。基本的に、文法は記号を扱い、語用論は推論を扱うという明確な区別をしている。コミュニケーションとはこうした文法を語用論と結びつけて行われるものであるという前提から出発するが、推論が頻繁に行われて多くの人

が認めるようになると記号となって意味化・文法化するという主張をしている。共時的のみならず通時的視点の必要性を説いている点も見逃せない特徴である。

Feist (2012) は英語における前位修飾表現を構造と意味の観点から論じたものである。名詞を前から修飾する形容詞の順序を *zone* という概念を使って統語的、意味的、機能的観点から統合的・体系的に捉えようとしている。Ariel (2008) と同様に共時的・通時的視点の双方を重視し、同じ形容詞でも無標と有標の位置があることを論じており、有標性の視点があることも特徴的である。

以上3つの文献はそれぞれ説得力のある多元的アプローチであり、言語獲得の説明が見えにくい点を除けば、次に紹介する動的観点による諸研究と共通する考え方が見られる重要な研究である。

2. 動的観点も加味した分析

佐々木 (2011: 22-23) では Kajita (1977, 1986, 1997) などで開催されている動的文法理論を次のように説明している。

文法的ダイナミズムの理論は言語理論に時間軸を組み込み、言語獲得過程のある段階から次の段階へと文法が移行する際の「拡張」を支配する法則・原則を仮定して、母語獲得と言語の多様性を説明しようとするものである。そして重要なのはこうした法則が統語情報と意味情報の両方に言及できるという点である。これは動的視点を基幹の枠組みとして、「拡張」の法則・原則を通じて母語獲得の事実を説明し、併せて多様な言語事実も扱おうとするものである。こうした姿勢には母語獲得の不思議を説明しようとする生成文法の問題が見られ、同時に言語事実を真摯に記述しようとする総合的文法観（あるいは包括的文法観）も確認できる。さらに、実際の運用面において重要な談話構造や言語使用からの要請、意味機能・比喩といった概念も「拡張」の促進に関与するため、談話文法・語用論・認知言語学の視点も組み込まれることになる。なお、動的視点は、言語の歴史的变化にも適用できるものと思われる。

こうした文法に対する動的な視点に立って、Sasaki (2008) では英語の形容詞 *nearby* の分析を行ったが、その概要を佐々木 (2011: 17) は以下

のように説明している。

Sasaki (2008) では多機能な複合語 *nearby* に着目して、その副詞・前置詞・形容詞・名詞としての多様な働きを *Webster's Third New International Dictionary* を参照しながら、形態論・統語と意味の関係・談話構造・言語発達の観点を統合する形で論じている。(1) の対話を見てみよう。

(1) A: How was your weekend?

B: Pretty good. We went to a nearby river for a cookout. (Shiozawa and King 2007: 12)

(1B) において *nearby* は名詞 *river* の意味範囲を限定する前位修飾語として可能であるが、これとは対照的に、(2B) の対話では同義語の *near* は同じコンテキストで用いることができない。

(2) A: How was your weekend?

B: Pretty good. *We went to a near river for a cookout.

しかしながら、*near* の容認可能性は、興味深いことに (3) のような最上級や (4) のような時を示す表現として用いられると向上する。

(3) She went to the nearest restaurant. (Konishi et al. 2001: 1461; Konishi et al. 2006: 742)

(4) in the near future (Konishi et al. 2001: 1461)

Sasaki (2008) では、こうした複合形容詞 *nearby* が母語獲得や言語史を含む言語発達の観点からどのようにして英語において可能となり、その結果として形態的、統語的・意味的、談話構造的特性を備えるに至ったかを、Kajita (1977, 1986, 1997), Sasaki and Yagi (2003) など提案されている動的分析に基づいて概観した。

本論文では、特に第 III 節においてこの多元的・動的アプローチにより日本語の分析を行うことにする。

II. データ

1. 藤沢作品を選んだ理由

藤沢周平を選んだことにはいくつかの理由がある。まずは、時代背景が江戸時代であり現代とは異なるものの、構文的に分かりやすい現代日本語で語られているからである。語られているとしたのは、音読や映画化が比較的容易な朗読するのに適した作品で、日本語固有の音韻を楽しむことが

できるということである。また、人情と希望を語る名作短編集としてストーリーを味わうこともできる点も見逃せない。さらに、言語学の観点から藤沢作品を見ると、語・句・文のレベルでそれぞれに興味深い事実が観察されるからである。具体的には、「夜逃げ」に代表される複合名詞、「二人のならず者」などの数量詞や修飾語句をともなう名詞句、「笑いがこみ上げる」などの比喩を含んだ文が頻繁に用いられ、これらの表現について文法の観点に語用論の観点も重ね合わせて論じる意義があるからである。

2. 小説「踊る手」の概要

「踊る手」は江戸下町を舞台とした短編小説で、夜逃げにまつわる話である。

ある日小間物屋の伊三郎一家が夜逃げをする。長屋の一角に住んでいた伊三郎と妻のおかつ、一人娘のおきみ（八歳）が姿を消し、家財道具も一切なくなっているのだが、なぜか伊三郎の祖母が一人取り残される。夜逃げの理由は、伊三郎が博奕好きでそれがもととなった借金の取り立てを逃れるためである。おきみと仲良しの主人公信次（十歳）はおきみがどうしているか心配で仕方がない。一方、一人残された伊三郎の祖母に対して長屋の住民や近所の人たちは夜逃げした家族に憤りを持ちつつ、その老婆を哀れに思い、食事を与えようとする。信次の母もその一人であるが、老婆は応じない。そこで信次の母は息子の信次に食事について託すことにする。信次がおきみの家に遊びに行っていた時に、おきみの曾祖母であるこの老婆に会ったことがあるからである。これが功を奏し、老婆は食事を食べるようになって元気を取り戻す。そうこうしているうちに、借金の取り立て屋が時おりくる中で、おきみの母親そして父親の伊三郎が現れ、祖母を連れ出しに来る。老婆はうれしくなり、伊三郎の背中に紐でくくりつけられた状態でおんぶされて路地を遠ざかって行ったが、その様子はさし上げた両手をほい、ほいと踊るように振るのが見えた。その様子を見ていた信次も笑いがこみ上げて来るのである。

夜逃げという切羽詰まった負の行動の中に見られる当事者と周囲の人たちが見せる人情とほのかな希望を感じさせる作品である。

3. データ

以下に示す3つの passages A～Cは藤沢周平の「踊る手」より引用したものである。それぞれ小説の一部を抜き出したが、ストーリーの順序に沿って提示している。各 passage には通常の下線、二重下線、破線の下線が筆者により施している箇所があり、生成文法の統語論の区分に従ってそれぞれ本研究で論じようとする興味深い語、句、文あるいは節を表している。

[A] 信次が遊びから帰って来ると、裏店の路地に人がいっぱい出ていた。ほとんどは裏店の女たちで、信次の母親もその中にいたが、ほかに信次が見たこともない男たちが二、三人混じっていた。男たちはみな羽織を着ていた。

女たちも、羽織を着た男たちも、みな同じ方向を見ていた。時どき額を寄せて何かささやき合うこともあるが、すぐに顔を前にもどす。人びとが見ているのは伊三郎の家だった。その家の戸が開いていた。

外に出ている人間は大人ばかりではなく、信次よりも小さい子どもたちもいた。男の子も女の子も、母親の手に縋って伊三郎の家を眺め、かと思うとすぐに倦きて、鼠のように女たちの間を走り回っては頭を張られたりしている。

信次も母親のそばに行った。

「おきみちゃん家、何かあったの？」

信次が聞くと、前をにらんだままで答えた。

「夜逃げだってさ」

「夜逃げってなに？」

「昨夜のうちに、家の者がいなくなっちゃったんだよ」

母親の言葉で、信次は胸がどきんと波打ったのを感じた。おきみは伊三郎の家の一人娘で、信次より二つ歳下の八つである。小さいころから気の合う遊び友だちだった。

おきみも一緒にいなくなったのか、と聞こうとしたとき、伊三郎の家から男が一人出てきた。信次の知っている人間だった。少なくなった髪をやっと掻きあつめて鬘を結っている、小太りで赤ら顔のその男は、大家の清六である。

清六は、羽織を着ている男たちのそばに来ると、

何にも言わずに首を振った。

「相変わらずだんまりですか」

羽織姿の男たちの中で、一番背が高く痩せている老人が言った。清六がうなずいた。

「何を訊いても、返事をしません。床に入って目をつぶったままですよ」

「眠ってんじゃないでしょうね」

もう一人の羽織の男が言ったが、清六はそれには強く首を振った。

「いや、聞こえてはいるのですよ。伊三郎夫婦や子供がどこに行ったかと訊いたら、ばあさん、涙をこぼしましたからね」

「まあ、かわいそう」

信次の母親よりもっと太っている女房が、姿に似ないかわいい声でそう言うと、それまで耳を澄まして清六と男たちの話を聞いていた女たちが、一斉にしゃべり出した。

「何て人たちだろう、年寄りを置いて自分たちだけ姿をくramsなんて」

「おかつさんを、あたしゃ見そこなっていたね」

「そうともさ。おとなしそうな顔をしてよくもこんなひどいことが出来たものだ」

「猫をかぶってたんだよ、あのひと」

「ちょっと、ちょっと。みんなはそう言うけどさ、おばあちゃんを残して夜逃げするからには、あの家にもそれなりの事情があったんじゃない」

「そりゃ、事情はあるでしょうよ。伊三郎さんて、姿がよくて口も達者、うってつけの小間物売りに見えたけど、半分は博奕打ちだったもんね」

「ああ、知らなかった。あのひと、博奕打つたの」

「それじゃおかつさんが、いくら内職したって追いつきやしないわ」

「でもさ、それとこれとはちがうんじゃないかね」

ドスの利いた口をはさんだのは、亭主同様に、まっくろな顔をしている鑄掛屋の女房だった。

「どんな事情があったにしろ、年寄りだけを残して出て行くなんてことは、あたしゃ頼まれても出来ないね」

「それはそうだ」

同感する声^が、二つ三つ上がった。その声に力を得たように、鑄掛屋の女房は黒い馬づらを回し

て、女たちをぐるりと見回した。（「踊る手」132-135頁）

[B] 表通りに走り出たところで、信次はぎょっとして足をとめた。道ばたにいつか伊三郎の家に乗りこんで来た、二人のならず者がいるのを見つけたのである。

二人の男は表店の味噌醤油商い、津川屋の塀に寄りかかっていた。そしてそこから時どき裏店に通じる路地の入口に目を配っている様子だった。当時信次の姿も目に入ったに違いないが二人は何も言わなかった。

うつむいて、信次は二人の前を通りすぎたが、男たちは声をかけて来なかった。

「兄貴、野暮用もほどほどにして、早えと新石場に繰りこみやしょうぜ」

「バカ野郎、能天気なことを抜かさず、しっかり見張れ」（「踊る手」151頁）

[C] 「伊三郎はそう言うと、背中のばあちゃんをゆすり上げて、ばあちゃん行くかと言った。

ほい、ほい、ほいと伊三郎はおどけた足どりで、路地を遠ざかって行く。その背に紐でくくりつけられたばあちゃんが、伊三郎の足に合わせて、さし上げた両手をほい、ほいと踊るように振るのが見えた。

— ばあちゃん、うれしそうだな。

と信次は思った。すると腹から笑いがこみ上げて来てとまらなくなった。母親の説教など少しもこわくなくなっていた。信次は自分も両手をさしあげて、おどけた足どりでほい、ほいと言いながら路地を家の方に歩いた。（「踊る手」156頁）

III. 多元的・動的分析の方向性

この節では、文文法の研究として重要な3つの統語的レベルである語、句、文の観点から例文を分析するが、その際には談話文法とかかわる語用論の原理が働いて実際の言語運用となっている様相を説明する。そして、文文法と談話文法、換言すれば文法と語用論を有機的につなぐ基幹として動的な原理が働いていることを論じる。

取り上げる例文は passages A～Cの順とし、基本的に話の筋に沿って各例について説明してい

く。

1. Passage A

この Passage A では 8 つの事例を考察する。

(5) 遊び、裏店、路地、母親、羽織、夜逃げ、一人娘、遊び友だち、小太り、赤ら顔、だんまり、羽織姿、伊三郎夫婦、年寄り、小間物売り、博奕打ち、鑄掛屋

これらはいずれも語の例であるが、形成の過程には何種類かがある。たとえば「遊び」は動詞の連用形から由来する転成名詞であり、「裏店（うらだな）」は複合名詞である。複合名詞の一部が動詞の連用形由来の転成名詞である場合もあり、「夜逃げ」「遊び友だち」「小太り」「年寄り」「小間物売り」「博奕打ち」が挙げられる。

ここでは「夜逃げ」を代表例として考察したい。この名詞は「夜」と「逃げ」からなる複合語で、『日本国語大辞典』（第二版）によれば、「借金を返せなくなったり、不都合な事情があったりして、夜の闇にまぎれて住んでいる所から逃亡すること。よぬけ。」という意味であり、初出は 1220 年頃の『平治物語』と記載されている。

この複合語は普通名詞「夜」と動詞連用形からの転成名詞「逃げ」から構成されているが、その発生過程は、『平治物語』で使用される前に「夜に逃げる」のような動詞を用いた表現が使われていたものと推定される。そうした表現が多用される社会状況があり、それが表現の簡潔さを求めて、特定の意味を明示するために語彙化されて「夜逃げ」の発生につながったのではないかと考える。そして、このような転成名詞を含んだ複合名詞が新たに導入される場合に、第一に日本語の文法に則らなければならないのだが、そこには語用論的・動動的な動機づけが働いていることに注意する必要がある。「夜逃げ」以外にも「遊び友だち」「小間物売り」「博奕打ち」などの複合名詞が同様の例である。

(6) ほかに信次が見たこともない男たち

この名詞句は、「ほかに信次が見たこともない」が前位修飾表現として主要部名詞の「男たち」を限定修飾しており、これも日本語の文法に則っている。なお、「ほかに」が「信次の母親を含む裏店の女たち以外に」ということを指しているのが

分かるのは、先行文脈のおかげである。

(7) 時どき額を寄せて何かささやき合うこともあるが、すぐに顔を前にもどす。

この文に現れている「顔を前にもどす」は文脈から「もとの方向を見て伊三郎の家を見る」という意味であるが、比喩（隠喩）が働いている慣用句である。特に辞書に記載される程には定着していないが、字義通りの意味では文脈にそぐわないため、ある種の語用論的推論が働いて上述した書き手の意図が理解できるようになる。同様の議論は方（2011：6）の「目を戻す」でも指摘されている。また、Passage A のあとに出てくる「猫をかぶってたんだよ、あのひと」も比喩表現の慣用句であるが、この例は辞書に記載されている定着した表現である。

(8) 鼠のように女たちの間を走り回って

この「鼠のように」も比喩表現であるが、「ように」という明示的な表現があるため、直喩と考えられる。いずれにしても効果的な比喩表現が多用されていることが確認できる。

(9) 伊三郎の家から男が一人出てきた

この例での「男が一人」は、奥津（1996）が言う NCQ 型の数量詞（名詞＋格助詞＋数量詞）で、動詞「出てきた」が後続する。奥津（1996）によれば NCQ 型が日本語として最も自然な表現（范喜春氏からご教示いただいた）で、こうした NCQ 型が談話の中である人物を初めて登場させる場合に最も適した型であると考えられている。そしてこの数量表現のおかげで、名詞の単数複数の区別が英語ほど明確でなく冠詞をもたない日本語でも、男が一人であることを簡潔かつ明示的に示すことができる。(9) は英語の *There was a man coming out of Isaburo's apartment.* ないし *Out of Isaburo's apartment came a man.* に相当する。Passage A のほぼ最後に出てくる「同感する声が、二つ三つ上がった。」も同種の表現である。

(10) 「眠ってんじゃないでしょうね」

もう一人の羽織の男が言ったが、清六はそれには強く首を振った。

このやりとりでの清六の反応は興味深い。すなわち、「眠ってんじゃないでしょうね」という否定の確認文に対して、清六が強く首を（横に）振って（つまり No と意思表示して）老婆が眠ってい

ないことに同意しているからである。日本語はふつう英語と異なり、否定内容を含んだ命題に対して同意する場合に Yes と応え、同意しない場合に No と応える。しかし、このやりとりで清六は男のせりふの肯定部分（「眠っている」）を受け、それに対して首を横に振って No であることを示していると考えられ、英語と同様の反応をしている点がおもしろい。

(11) 「でもさ、それとこれとはちがうんじゃないかね」

ドスの利いた口をはさんだのは、亭主同様に、まっくろな顔をしている鑄掛屋の女房だった。このやりとりでは、二番目の文「ドスの利いた口をはさんだのは、亭主同様に、まっくろな顔をしている鑄掛屋の女房だった。」が日本語のコピュラ文（分裂文）であり、談話の流れの中で適切な使われ方をしている。なぜなら、この分裂文は、先行文「でもさ、それとこれとはちがうんじゃないかね」が示している行為を「口をはさんだのは」という表現で既知情報として主語に立てて、そのあとに「鑄掛屋の女房」という新情報である補語を持ってくる形で焦点化を達成しており、日本語の特殊構文のひとつである分裂文を活用して焦点を明示しているからである。なお、主語には「ドスの利いた」という「口」に対する前位修飾表現が添えられて新しい情報を効率よく付け加えていることに注意されたい。また、補語の内部構造を分析すれば、主要部名詞が「女房」であり、この名詞が関係概念を表す関係で補部として「鑄掛屋(の)」をとり、さらにその前に関係節「亭主同様に、まっくろな顔をしている」が前位修飾表現として現れており、これらの点も日本語の文法に則っている。最後にこの分裂文の発理由を考えると、無標の構文ではなく敢えて有標の構文を使うことにより、書き手の意図を明確にしかも効率よく（あるいは経済的に）伝えることができるため、やはりこの分裂文には語用論的で動的な動機づけが働いていると考えられる。

(12) その声に力を得たように、鑄掛屋の女房は黒い馬づらを回して、女たちをぐると見回した。

この文での「鑄掛屋の女房」という名詞句は、指示詞などを伴わないのに意味的に定であること

が興味深い。先行文脈にある上述の分裂文の焦点の位置に出てきたため、既知となり、定と捉えるためであろう。

2. Passage B

ここでは Passage B 全体の談話の流れを(13)で、そこに出てくる複合名詞を(14)で考察する。

(13) 表通りに走り出たところで、信次はぎょっとして足をとめた。道ばたにいつか伊三郎の家に乗りこんで来た、二人のならず者がいるのを見つけたのである。

二人の男は表店の味噌醤油商い、津川屋の塀に寄りかかっていた。そしてそこから時どき裏店に通じる路地の入口に目を配っている様子だった。当時信次の姿も目に入ったに違いないが二人は何も言わなかった。

うつむいて、信次は二人の前を通りすぎたが、男たちは声をかけて来なかった。

「兄貴、野暮用もほどほどにして、早えとこ新石場に繰りこみやしょうぜ」

「バカ野郎、能天気なことを抜かさず、しっかり見張れ」

この談話の下線を施した「二人のならず者」「二人の男」「二人」「二人（の前）」「男たち」はいずれも同じ人たちを指しており、「男たち」を除いて数量詞の「二人」が共通に生じているが、表現はそれぞれ異なっている。これらのうち「二人のならず者」「二人の男」「二人」はこの順で表現が徐々に「省略」されて簡略化しており、経済化が図られている。「二人」に至っては数量詞のみとなり、代名詞の働きを兼ねている。このように日本語の数量詞には様々な統語的分布とそれに対応する意味が観察される。単に「二人」と言ってもこの場合のように「その」などの指示詞がなくても特定の二人を指す「定」の場合もあれば、別の文脈では「不定」を指す場合もあり多様である。こうした多様性が日本語に顕著に見られる理由は、単数・複数の区別があり数詞を直接加算名詞に付けて数の詳細な区分ができる英語に比べて不足する表現力を補うためと捉えられる。その一方で、「男たち」が「二人のならず者」を指せるのは、文脈を考慮しているからであり、文脈から取り出して「男たち」を普通名詞のいわば複数形と見な

すだけでは不十分である。以上から分かることは、数量詞を含んだ表現や名詞表現は形態論と統語論の規則・原則に従うのであるが、一定の文脈においてどの表現を用いるかは文脈・場面に応じた語用論的な選択の問題であるということである。

(14) 表通り、道ばた、ならず者、表店、味噌醬油商い、津川屋、入口、野暮用、新石場、バカ野郎、能天気

これらはいずれも複合名詞であるが、内部構成を見てみると要素間の関係は様々である。たとえば、「表通り」の「表」は「通り」を修飾しているが、「味噌醬油商い」での「味噌」と「醬油」は並列構造であり、その「味噌醬油」が全体として「商い」を修飾している。これに対して、「能天気」の意味（のんきで軽薄な様子）は要素どうしの関係が不明瞭で、単純な意味の足し算では出て来ないものであり、その発生には慣用表現に共通する語用論的・動的な動機づけが存在していると思われる。

3. Passage C

最後に、Passage Cでは(15)と(16)ともに比喩について考察する。

(15) ほい、ほい、ほいと伊三郎はおどけた足どりで、路地を遠ざかって行く。その背に紐でくくりつけられたばあちゃんが、伊三郎の足に合わせて、さし上げた両手をほい、ほいと踊るように振るのが見えた。

この引用の最後に出てくる「さし上げた両手をほい、ほいと踊るように振るのが見えた」はこの小説のタイトルに結びつくものだが、擬態語「ほい、ほいと」を使いながら「(両手を)踊るように振る」という直喩を活用して描写している。ここでも比喩を用いて表現力を高めるという語用論的選択がなされている。

(16) すると腹から笑いがこみ上げて来てとまらなくなった。

この最後の文でも「笑いがこみ上げてくる」という比喩が用いられているが、この場合は隠喩である。抽象的な概念である「笑い」を「こみ上げてくる」の対象としていわば具現化・顕在化することにより、イメージすることが容易となるため、表現効果が高まっている。これも語用論的選択の

問題である。

以上のような比喩表現には、やはり語用論的・動的な動機づけがあり、推論や意図の明確化や効率性・経済性がかかっていると考えられる。

おわりに

本論文では、藤沢周平の短編小説「踊る手」を素材にして、最近の理論動向もふまえて日本語における多元的かつ動的な言語分析を試みてきた。

第I節では多元的アプローチとして Keizer (2007)、Ariel (2008)、Feist (2012) を紹介し、動的アプローチとして Kajita (1977, 1986, 1997)、Sasaki (2008)、Sasaki and Yagi (2003)、佐々木 (2011) に言及した。第II節では対象とする日本語のデータを藤沢の「踊る手」から引用して提示した。第III節では語・句・文のレベルで理論的分析を行い、その結果、統語論のみならず、意味論、形態論、音韻論を含む広義の文法が、動的な考え方の中で、語用論とどのような相互作用が見られるかについての考察を行った。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1996) 「連体即連用? 第3回 数量詞移動 その一」『日本語学』15巻1号。
- 佐々木一隆 (2011) 「英語名詞句の総合的分析に向けた多元的・動的アプローチ」『宇都宮大学国際学部研究論集』第32号、17-25頁。
- 方小賛 (2011) 『日本語と中国語における身体語彙慣用句の比較研究—認知言語学の視点から見た「頭部」表現を中心に—』宇都宮大学大学院国際学研究科博士論文。
- Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and Grammar*. Cambridge University Press.
- Feist, Jim (2012) *Premodifiers in English: Their Structure and Significance*. Cambridge University Press.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a dynamic model of syntax", in *Studies in English Linguistics* 5, pp. 44-76.
- Kajita, Masaru (1986) "From periphery to core: a research strategy", Paper presented at TCEL.
- Kajita, Masaru (1997) "Some foundational postulates

for the dynamic theories of language”, in M. Ukaji *et al.*, eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*, Taishukan Publishing Company, pp. 378-393.

Keizer, Evelien (2007) *The English Noun Phrase: The Nature of Linguistic Categorization*, Cambridge University Press.

Sasaki, Kazutaka and Takao Yagi (2003) “Prenominal Modifiers in English : An Outline of a Dynamic Analysis”, *Empirical and Theoretical Investigations into Language : A Festschrift for Masaru Kajita*, Kaitakusha Publishing Company, pp. 612-618.

Sasaki, Kazutaka (2008) “A Story of *Nearby* : A Morphological, Syntactico-Semantic, Discourse-Based, and Developmental Perspective”, *Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, Hituzi Shobo.

引用例文出典

『初つばめ「松平定知の藤沢周平をよむ」選』
藤沢周平、実業之日本社、2011年。

Konishi, Tomohichi, *et al.* (2006) *Sanseido's Dictionary of Present-day English Usage*, Sanseido Co., Ltd.

Shiozawa, Tadashi and Gregory A. King (2007) *New Activator*, Kinseido Publishing Co., Ltd.

Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged, 1976, Springfield : G. & C. Merriam Company, Publishers.

A Multi-dimensional and Dynamic Approach to the Analysis of Japanese Words, Phrases, and Sentences

SASAKI Kazutaka

Abstract

This article is aimed at presenting a multi-dimensional and dynamic approach to the analysis of Japanese words, phrases, and sentences by quoting several passages from one of Shuhei Fujisawa's short stories entitled *Odoru Te* ("Dancing Hands"). To pursue this aim, I will focus on the interaction between grammar and pragmatics by considering a dynamic theory of language as an overriding approach that crucially refers to each stage of language development and thus attempts to explain language acquisition plus the diversity of human language. The grammar in this article refers to the broader sense of its definition in that it covers morphology, phonology, and semantics as well as syntax. The article is composed of three sections. In Section I, I introduce three important multi-dimensional approaches that deal with the interaction between grammar and pragmatics, and a dynamic approach as developed by Kajita (1977, 1986, 1997). Section II shows data on several passages from one of Fujisawa's short stories. In Section III, using the data, I give a sketch of a multi-dimensional and dynamic analysis of Japanese compound nouns, noun phrases including certain types of quantifiers or pronominal modifiers, and sentences that are concerned with figurative expression or discourse/context.

(2012年6月1日受理)